



HORIKOSHI-KOUMAKI SITE

堀越甲真木遺跡

2006.3

前橋市歴史文化財発掘調査団

はじめに

前橋市の北にそびえる赤城山は、往古から人々とかかわりが深く、親しまれ愛される逍遙の山であります。とりわけ、赤城山南麓は、その悠々と裾野を広げる台地を中心として、岩宿遺跡に代表されるように遠い旧石器時代から現在まで人々のさまざまな生活が繰り返されました。

前橋市・大胡町・宮城村・粕川村の1市1町2村は平成16年12月5日に合併を行い、赤城山南麓の広範囲を占めることとなりました。

かつて、この地の糞養を支えた風物詩といえる桑畑は消えゆく運命を辿っております。近年、赤城山南麓一帯は産業構造の変化と相まって大規模な圃場整備事業や工業団地、住宅団地造成、道路建設が広範囲に実施されたため数多くの発掘調査が展開されました。

堀越町に所在する堀越甲真木遺跡も赤城山南麓に立地するものであり、調査によって遙か昔の縄文時代の陥し穴を検出することができました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関の物心両面にわたるご協力や各方面のご配慮の結果といえます。また、調査が円滑に進められたのは、調査に携わってくださった作業員のみなさんのおかげです。ここに厚くお礼申し上げます。

なお、本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いです。



平成18年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団 長 根 岸 雅

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	
1	遺跡の立地	1
2	歴史的環境	1
III	調査の経過	
1	調査方針	4
2	試掘調査	4
3	調査経過	4
IV	層序	5
V	遺構と遺物	
1	土坑（いわゆる陥し穴）	8
2	炭層	11
3	出土遺物	13
VI	成果と問題点	14

例 言

- この報告書は、堀越町工業団地造成事業に伴う発掘調査に関するものである。
- 調査は前橋市教育委員会が行い、報告書は前橋市埋蔵文化財発掘調査団が作成した。
- 発掘調査の要項は以下のとおりである。
調査場所／前橋市堀越町578番1ほか
調査担当／後藤俊継・遠藤たか美
調査期間／H17.01.06-17.02.03
整理期間／H17.11.10-18.03.10

I 調査に至る経緯

堀越甲真木遺跡は、堀越町の一部で行われた開発の際、付けられた遺跡の名称である。堀越町や隣接地区の横沢町にも横沢城や古墳群を始めとして、多数の遺跡や包蔵地が存在する。開発地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、土器片の分布が全面的に認められたことや周囲の包蔵地の状況、現地から遺跡地の可能性が高いと判断した。開発の内容が工業団地造成であるので、開発者である当時の大胡町長から大胡町教育委員会教育長宛へ、平成16年11月19日に埋蔵文化財の試掘確認調査について依頼が提出された。合併前後という時期であり、当時の大胡町文化財調査担当者と調整し、試掘調査の時期や埋蔵文化財の情報の把握に努め、大胡支所総務課との協議に入る準備を進めた。

平成16年12月7日電話で大胡支所総務課とこれまでの経緯を再度確認し、直接協議を持つことの約束を得た。12月9日、埋蔵文化財に関する取扱いについて詳細に説明し、試掘調査の協議が整った。また試掘結果に基づき、改めて取り扱い方針を協議することとなった。そこで試掘調査を12月13日から22日まで行うこととなった。調査の結果、土坑や溝を確認したため、遺跡地と判明する。そこで、12月24日と27日に再度、大胡支所総務課と協議を行った。その結果、埋蔵文化財の遺構深度や開発内容から遺構の保存が無理と判断されたため記録保存のための発掘調査をする合意を得る。調査期間は、平成17年1月6日から2月10日となる。年度末であるため整理作業や報告書作成は、平成17年度に実施することとなった。

報告書作成業務は、平成17年9月14日前橋市長高木政夫（依頼者）から前橋市教育委員会が業務依頼通知を受け、業務を内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団へ照会をした。その結果、9月30日に受諾する旨が市教育委員会へあった。平成17年11月10日前橋市長高木政夫（依頼者）と前橋市埋蔵文化財発掘調査団団長根岸雅の間で契約締結が行われ、すべての業務は、平成18年3月をもって終了した。

II 遺跡の位置と環境

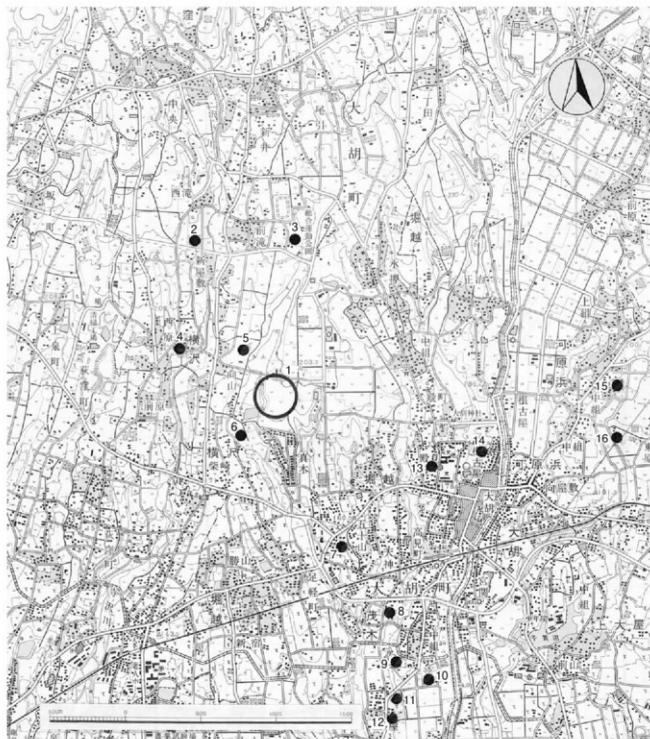
1 遺跡の立地

前橋の地形・地質の特徴は、大きく3地区に区分される。赤城山南麓に広がる火山性斜面、古利根川の流路となった広瀬川低地帯、前橋・高崎一帯に広がる前橋・高崎台地に分けられる。平成16年12月5日市町村合併により大胡、宮城、粕川地区が加わった。遺跡地のある堀越町は、前橋市の北東部に位置し市町村合併前の大胡町に属する。「裾野は長し赤城山」の赤城火山性斜面に立地している。この地域を載せる台地は、カルデラ型火山赤城山の火山活動に起因する火山堆積物（大胡火砕流堆積物）とそれを覆う関東ローム層によって形成される洪積台地で、荒砥川・神沢川・能満寺川・寺沢川等の河川により放射谷・火山麓扇状地を形成し現在に至っている。本遺跡地は、市役所から北東へ7.8km、大胡支所から北西へ1.3km、上毛電鉄大胡駅から北西へ1.6kmに当たる。遺跡地の周辺は、農地が広がっているが、農免道路の整備や個人住宅建設等開発の進んでいる地区である。

2 歴史的環境

現在に至るまで開発に伴う調査等により、旧石器時代から中世・近世までの遺跡地が確認されている。、主な遺跡を時代別に記述すると次のとおりとなる。

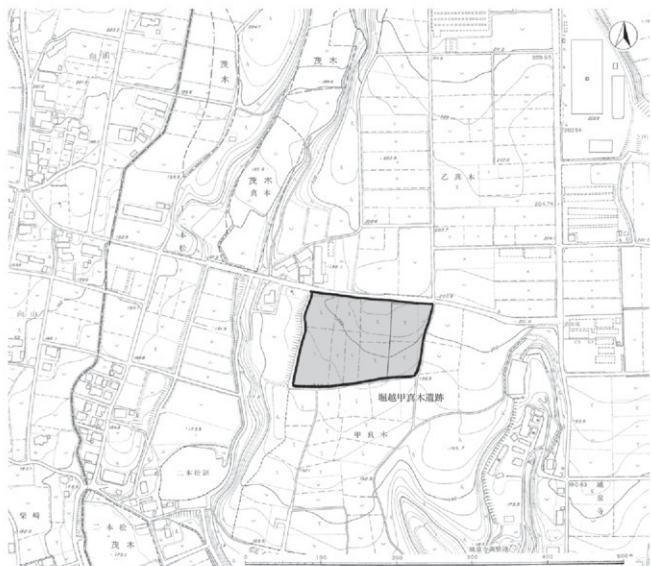
旧石器時代は、故相沢忠洋氏による調査で有名な三ツ屋遺跡（11）で黒曜石を素材とする尖頭器等の出土がある。その他、横沢新屋敷遺跡（2）、日光道東遺跡（15）、堀越丁二本松遺跡（5）などでも尖頭器等が出土している。



第1図 堀越甲真木遺跡の位置と周辺遺跡

周辺遺跡

- | | | |
|------------|----------|-----------|
| 1 堀越甲真木遺跡 | 7 堀越古墳 | 13 殿町遺跡 |
| 2 横沢新屋敷遺跡 | 8 天神風呂遺跡 | 14 大胡城址 |
| 3 堀越丙二本松遺跡 | 9 西小路遺跡 | 15 日光道東遺跡 |
| 4 横沢城址 | 10 上ノ山遺跡 | 16 浅見遺跡 |
| 5 堀越丁二本松遺跡 | 11 三ツ屋遺跡 | |
| 6 茂木二本松遺跡 | 12 小林遺跡 | |



第2図 遺跡周辺図

縄文時代の遺跡数は多く、調査において早期から後期までの遺跡が確認されている。早期の遺跡は、押型文系土器が横沢新屋敷遺跡(2)、浅見遺跡(16)等で出土が確認されている。前期の遺跡は、横沢新屋敷遺跡(2)や堀越丙二本松遺跡(3)、茂木二本松遺跡(6)等の発掘調査から確認されている。中期になると遺跡数が増加し、横沢新屋敷遺跡では五領ケ台式期の土器の検出があり、上ノ山遺跡(10)、西小路遺跡(9)でも確認されている。後期では、堀越西一丁田遺跡が調査されているが、晩期の遺跡は現在のところ確認はされていない。

弥生時代の遺跡としては、再葬墓と思われる金丸遺跡が著名であるが、その内容等不明なところが多い。

古墳時代に入ると遺跡数は急激に増える。旧大胡町に残る古墳は、県指定文化財でもある堀越古墳(7)、堅穴式石室を持つ古墳が上ノ山遺跡内にある。堀越甲真木遺跡の北西に位置する場所に横沢古墳群も存在する。同時代・前期の集落としては上ノ山遺跡(10)、中期の集落には天神風呂遺跡(8)、後期でも天神風呂遺跡(8)や小林遺跡(12)が当時の痕跡を残している。

奈良・平安時代になると更に遺跡数は増え、古墳時代後期から連綿として生活の跡が辿れる天神風呂遺跡(8)、小林遺跡(12)がある。

中・近世の遺跡となると、中世の城館として本丸・二の丸が県指定史跡となっている大胡城址(14)があり、枳形門・土塁・空堀等の遺構が残る。また、大胡城の支城とされる横沢城址(4)、大胡城武家屋敷址の殿町屋敷(13)などがある。その他、近世の屋敷跡は、上ノ山遺跡(10)でも確認されている。

III 調査の経過

1 調査方針

調査にあたっては、第IX系国家座標に合わせグリッドを設定した。グリッドは、4 mピッチで西から東へX0、X1、X2と、北から南へY0、Y1、Y2と付番し、グリッドの呼称は北西の杭の名称を使用した。調査は、表土掘削に重機を使用し、その後、ジョレンかけにより遺構の検出・プラン確認を行い、土層観察用のベルトを設定後、各遺構の調査を進めた。遺構の平面図は縮尺1/20を基本に、調査区の全体図は縮尺1/200で作成した。また遺構の記録写真は35mmのモノクロ・カラー滑りタイプの2種類のフィルムを用い逐次、撮影を行った。

2 試掘調査

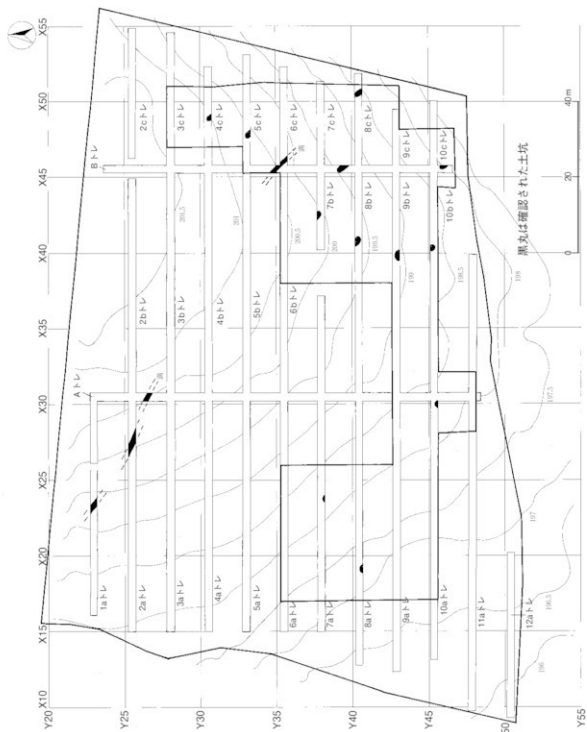
試掘調査は、平成16年12月13日から22日の8日間で行われた。13日から14日は、業者委託による20mピッチの植杭と水準杭の設置を行った。植杭後10m間隔で東西方向へトレンチを12本設定、約60mおきに南北トレンチ2本を設定した。開発面積約18,000㎡のうちの11.2%である2,030㎡の面積を試掘調査を行うこととなった。

15日から試掘調査区域の伐根作業をするため、重機（バックホウ0.7㎡）を1台投入し、併せて深堀を入れ土層確認を行った。16日から重機（バックホウ0.7㎡）を2台使い、2班体制で調査を進めた。調査は、重機により表土掘削、人力による精査を行い埋蔵文化財の有無を調べた。また縮尺1/500で調査区の全体図、縮尺1/100でトレンチの平面図、20mおきに縮尺1/20でセクション柱状図を作成し、写真撮影も併せて行った。調査の結果、縄文時代の陥し穴を含む土坑11基、古墳時代以降の溝2条の遺構と縄文土器片や、剥片を含む石器などの遺物を検出した。

3 調査経過

本調査は、平成17年1月6日から重機（バックホウ0.7㎡）1台を利用し、調査区内の桑の伐根から進めた。1月7日から重機（バックホウ0.7㎡）2台入れての掘削、併せて人力による精査を進め遺構の確認に努めた。調査区が4,700㎡と広大なため、職員2人と作業員7人を東西に班分けをして、それぞれに重機1台をつけた。また、掘削の土量があるため10tダンプ1台を使い、排土を運搬した。As-Bを含む耕作土は重機を利用し掘削をしたが、II層のAs-Cを含む黒色細砂層からは人力による精査をして遺構の有無を確認した後、重機の掘削を行った。1月11日から土坑（形状から陥し穴と考えられる。）が徐々に検出され、遺構確認と遺構の掘り下げに人を割り振った。作業を進めた結果、ダンプ1台では排土の運搬が間に合わないため、1月12日から10tダンプを3台入れた。1月13日西側調査区の重機を使用しての掘削が終了した。調査の結果、西側調査区からは土坑2基（形状から陥し穴と考えられる。）であった。1月14日をもって、調査区半分の掘削が終了した。ここまでの遺構確認数は、土坑6基（そのうち4基は、形状から陥し穴と考えられる。）であった。1月17日は週末の雨により、現場がぬかるみ、重機が利用できないため現場を急遽休みとし、これまでの作業内容と今後の調査内容について現場で確認した。1月18日から調査区が東部分に絞られたため、ダンプを2台に減らした。1月19日までに土坑10基（そのうち7基は、形状から陥し穴と考えられる。）、また調査区南東部から平安時代の炭窯も検出した。1月20日重機を使つての掘削が終了する。最終的に、土坑11基（そのうち8基は、形状から陥し穴と考えられる）、炭窯1基を検出した。

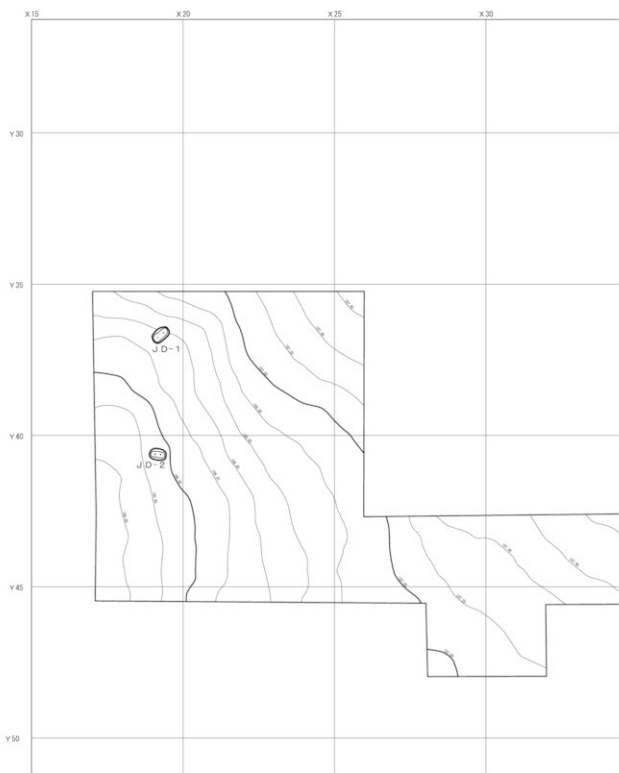
1月21日から28日まで遺構の掘り下げを行い、各遺構セクション図の作成と写真撮影を行う。陥し穴と考えられる土坑の底面から、2ないし3のピットを確認した。1月31日は、遺構の掘り下げが終了したので、個別・調査区全景の写真撮影を行った。2月1日から3日まで遺構、調査区の測量を行い、現地調査を終了した。



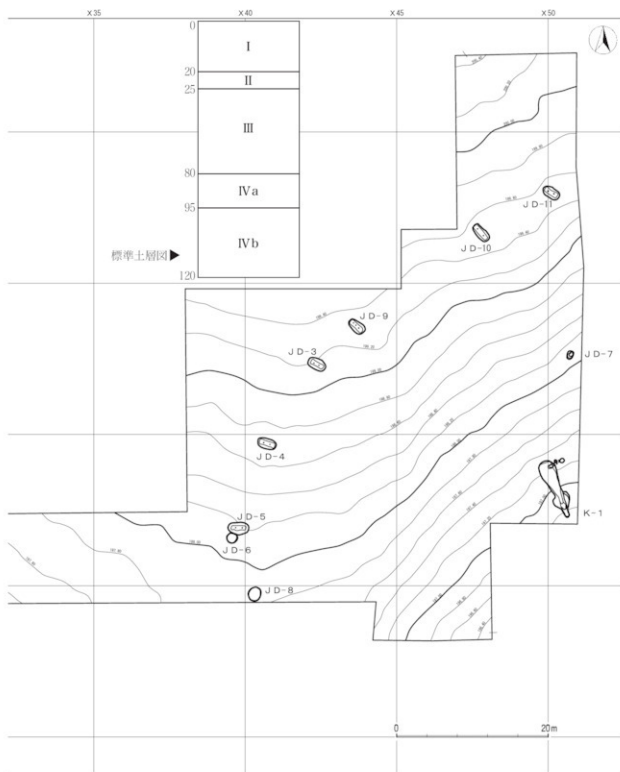
第3図 福越甲真木遺跡試掘調査平面図

IV 層 序

- I層 黒褐色粗砂層 耕作土層。As-B層を50%以上含む。粘性なく、締まりあり。
- II層 黒色細砂層 As-Cを含む細砂層。粘性を有し、締まりあり。
- III層 黄褐色細砂層 淡色黒ボク土。ソフトローム層。粘性が少しあるが、締まりが弱い。縄文時代遺物包含層。
- IVa層 明黄褐色微砂層 ローム層。As-YPを10%、As-SPを5%含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。
- IVb層 明黄褐色微砂層 ハードローム層。As-YPを5%含む、As-SPを10%含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。



第4图 掘越甲贞木遗址全体图



V 遺構と遺物

1 土 坑

第1号土坑 (第5図)

位 置 X-18・19～Y-36グリッドに位置する。**重複関係** なし。**規模・形状** 北東から南西方向に長軸を有し、長軸249cm・短軸158cmを測る。上面の平面形は楕円形で底面の平面形は隅門長方形である。深さは72cmを測り、断面形は箱状である。底面には、径8～12cm・深さ28～35cmを測るビット2基が長軸方向に列んで検出された。**遺 物** 縄文土器片1点、剥片1点出土。**備 考** 本土坑は、形状から所謂陥し穴と考えられる。

第2号土坑 (第5図)

位 置 X-18・19～Y-40グリッドに位置する。**重複関係** なし。**規模・形状** 東西方向に長軸を有し、長軸222cm・短軸151cmを測る。上面の平面形は楕円形で底面の平面形は隅門長方形である。深さは95cmを測り、断面形は箱状である。底面には、径12～14cm・深さ24～27cmを測るビット2基が長軸方向に列んで検出された。**遺 物** なし。**備 考** 本土坑は、形状から所謂陥し穴と考えられる。

第3号土坑 (第5図)

位 置 X-42～Y-37グリッドに位置する。**重複関係** なし。**規模・形状** 北西から南東方向に長軸を有し、長軸246cm・短軸148cmを測る。上面の平面形は楕円形で底面の平面形は隅門長方形である。深さは142cmを測り、断面形は箱状である。底面には、径10～12cm・深さ25～27cmを測るビット2基が長軸方向に列んで検出された。**遺 物** 打製石斧1点出土。**備 考** 本土坑は、形状から所謂陥し穴と考えられる。

第4号土坑 (第5図)

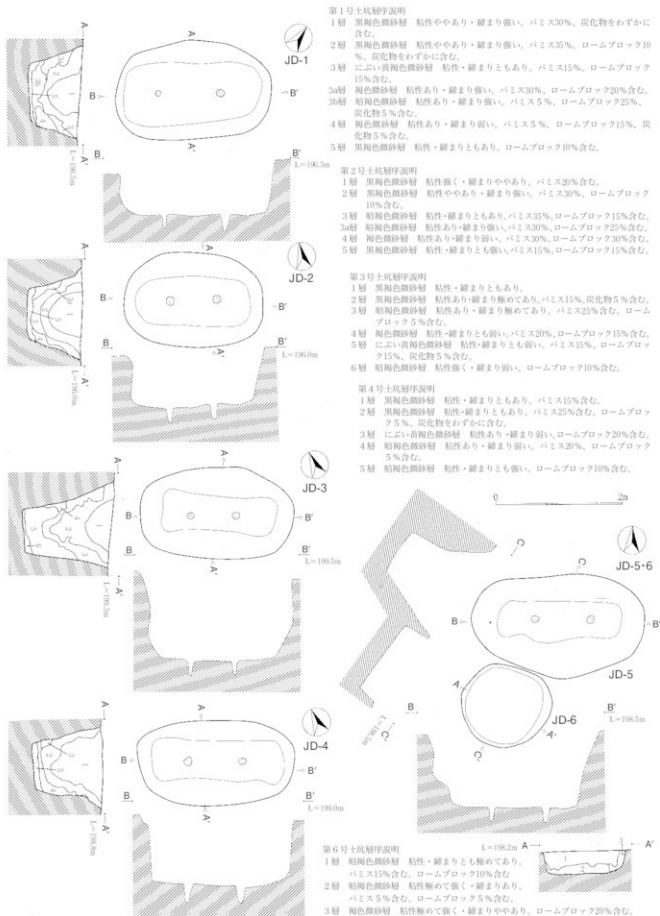
位 置 X-40・41～Y-40グリッドに位置する。**重複関係** なし。**規模・形状** 東西方向に長軸を有し、長軸251cm・短軸136cmを測る。上面の平面形は楕円形で底面の平面形は隅門長方形である。深さは111cmを測り、断面形は箱状である。底面には、径10～12cm・深さ29～34cmを測るビット2基が長軸方向に列んで検出された。**遺 物** 打製石斧1点出土。**備 考** 本土坑は、形状から所謂陥し穴と考えられる。

第5号土坑 (第5図)

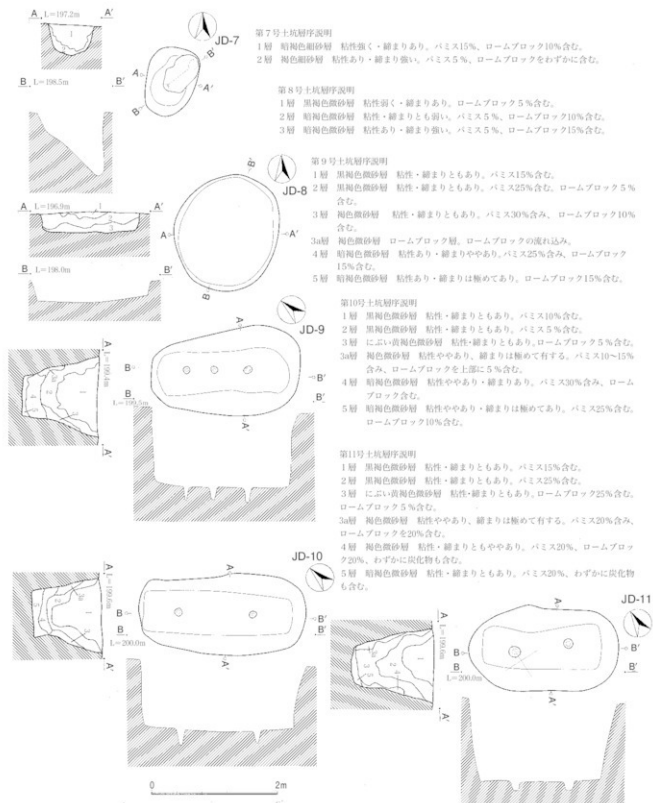
位 置 X39・40～Y-42・43グリッドに位置し、南側に第6号土坑が存在する。**重複関係** なし。**規模・形状** 東西方向に長軸を有し、長軸275cm・短軸166cmを測る。上面の平面形は楕円形で底面の平面形は隅門長方形である。深さは124cmを測り、断面形は箱状である。底面には、径11～13cm・深さ26～32cmを測るビット2基が長軸方向に列んで検出された。**遺 物** なし。**備 考** 本土坑は、形状から所謂陥し穴と考えられる。

第6号土坑 (第5図)

位 置 X-39～Y-43グリッドに位置し、北側に第5号土坑が存在する。**重複関係** なし。**規模・形状** 長軸144cm・短軸131cmを測り、平面形は上面・底面とも円形である。深さは43cmを測り、断面形は箱状である。底面はほぼ平坦である。**遺 物** なし。



第5図 土坑(1)



第6図 土坑(2)

第7号土坑(第6図)

位置 X-50~Y-37グリッドに位置する。重複関係 なし。規模・形状 長軸112cm・短軸78cmを測り、平面形は上面が隅円長方形で、底面不整形である。深さは42cmを測り、断面形はU字状である。遺物 なし。

第8号土坑（第6図）

位置 X-40～Y-45グリッドに位置する。**重複関係** なし。**規模・形状** 南北方向に長軸を有し、長軸189cm・短軸164cmを測り、平面形は上面・底面とも円形である。深さは35cmを測り、断面形は箱状である。底面は、ほぼ平坦である。**遺物** なし。

第9号土坑（第6図）

位置 X-43～Y-36グリッドに位置する。**重複関係** なし。**規模・形状** 北西から南東方向に長軸を有し、長軸238cm・短軸142cmを測る。上面の平面形は楕円形で底面の平面形は隅門長方形である。深さは126cmを測り、断面形は箱状である。底面には、径10～14cm・深さ24～25cmを測るビット3基が長軸方向に列んで検出された。**遺物** なし。**備考** 本土坑は、形状から所謂陥し穴と考えられる。

第10号土坑（第6図）

位置 X-47・48～Y-33グリッドに位置する。**重複関係** なし。**規模・形状** 北西から南東方向に長軸を有し、長軸264cm・短軸130cmを測る。上面の平面形は楕円形で底面の平面形は隅門長方形である。深さは115cmを測り、断面形は箱状である。底面には、径10～12cm・深さ26～33cmを測るビット2基が長軸方向に列んで検出された。**遺物** 打製石斧1点出土。**備考** 本土坑は、形状から所謂陥し穴と考えられる。

第11号土坑（第6図）

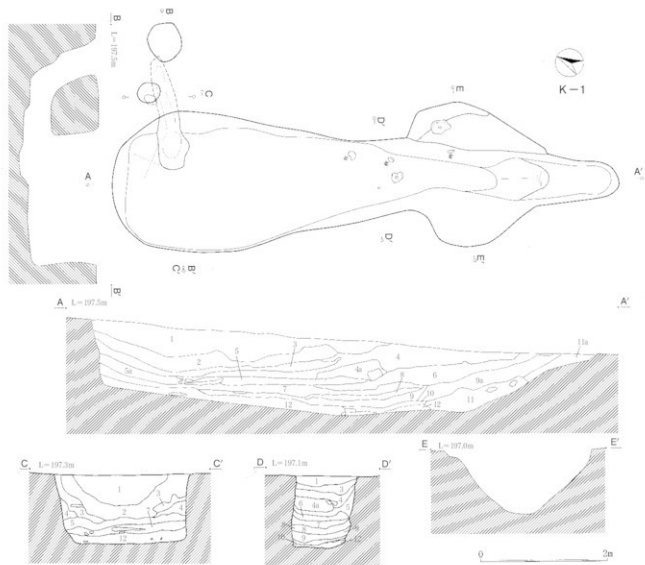
位置 X-49・50～Y-31・32グリッドに位置する。**重複関係** なし。**規模・形状** 北西から南東方向に長軸を有し、長軸238cm・短軸138cmを測る。上面の平面形は楕円形で底面の平面形は隅門長方形である。深さは131cmを測り、断面形は箱状である。底面には、径14～18cm・深さ12～13cmを測るビット2基が長軸方向に列んで検出された。**遺物** なし。**備考** 本土坑は、形状から所謂陥し穴と考えられる。

2 炭 窯

調査によって検出された平安時代の遺構は炭窯1基であった。覆土の状況、検出遺物により平安時代のものと考えられる。

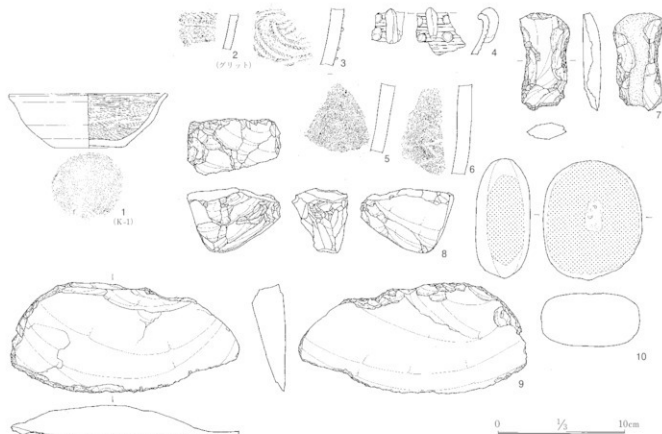
第1号炭窯（第7図）

位置 X-49・50～Y-40・41・42・43グリッドに位置する。**重複関係** なし。**規模・形状** 北西から南東方向に長軸を有し、主軸方位N-23°-Wである。平面形は羽子板状をなす。全長8.1m、入口部～焚口部3.2m、窯体4.9mを測る。焚口部幅は2.3m、窯体は奥壁付近で幅2.2mを測る。**煙道** 奥壁付近の東壁に2カ所付設され、壁面から27cm、80cm東側に、径約36cmと60cmの円形の煙出を有する。**床面** 入り口部付近はほぼ平坦ながら、入り口部から34cmのところで、傾斜し焚口部付近で最深部をとる。窯体では、奥壁に向かって緩やかに立ち上がり、奥壁でほぼ垂直に立ち上がる。**壁** 入り口部から焚口部は緩やかな傾斜で立ち上がり、窯体の壁部分はほぼ垂直に立ち上がる。**覆土** 土層は互層をなして堆積していることから、複数時の操業が考えられる。**遺物** 須恵器坏が1個体出土したので図示した。このほかに縄文土器や石器が出土しているが、混入したものである。**備考** 調査区の南東隅にあたるため、調査区外に炭窯や製鉄跡の存在が推定される。



第7図 炭 窯

- | | | |
|------|---------|--|
| 1層 | 黒褐色細砂層 | 粘性・締まりともあり、パミスわずかに含む。 |
| 2層 | 黒褐色微砂層 | 粘性・締まりともややあり、パミス10%、焼土粒5%含む。 |
| 3層 | 黒褐色微砂層 | 炭を主体とする黒褐色微砂層 粘性・締まりともややあり、炭を30%以上含む。 |
| 4層 | 黒褐色微砂層 | 粘性・締まりともややあり、炭25%、焼土粒15%、焼けたロームブロック20%が混入する。 |
| 4a層 | 灰黄色微砂層 | 粘性ややあり・締まり強い、焼土ブロックを多量に含む。白色粘土を主体とした層である。 |
| 5層 | 明赤褐色微砂層 | 焼けたロームを主体とした層。ロームは天井の構築材と考えられる。 |
| 5a層 | 明赤褐色微砂層 | ハードロームブロックを主体とした層。天井の構築材が落ちたものと考えられる。 |
| 6層 | 黒褐色微砂層 | 粘性・締まりともややあり、炭25%、焼土粒15%、焼けたロームブロック20%が混入する。 |
| 7層 | 黒褐色微砂層 | 粘性・締まりともややあり、炭25%、焼土粒15%、焼けたロームブロック20%が混入する。 |
| 8層 | 明赤褐色微砂層 | 焼けたロームを主体とした層。ロームは天井の構築材と考えられる。 |
| 9層 | 黒褐色微砂層 | 粘性・締まりともややあり、炭を主体とした層。還元した土層を10%含む。 |
| 9a層 | 暗褐色細砂層 | 粘性・締まりともややあり、ロームブロック15%、炭化物15%、焼土ブロック10%含む。 |
| 10層 | 黒褐色微砂層 | 粘性・締まりともややあり、炭主体の層である。 |
| 11層 | 暗褐色微砂層 | 粘性・締まりともややあり、ハードロームブロックを主体とする層である。 |
| 11a層 | 暗褐色細砂層 | 粘性・締まりともややあり、炭化物、焼土ブロック、ロームブロック15%含む。 |
| 12層 | 黄褐色微砂層 | 粘性強く・締まりややあり、床を覆う層である。炭化物10%、還元層の焼土10%、ロームブロックを含む。 |



第8図 出土遺物

3 出土遺物

出土遺物は、第1号炭窯遺構の底面近くから須恵器1点が出土したため、時期決定可能な遺物といえる。縄文土器や石器については、総数20点程度であり、土坑との共伴は考えられない。仮に土坑との共伴を想定するならば、早期後半の縄文土器5・6が考えられよう。

1は、須恵器坏形土器である。口径12.4cm、高さ4.2cm、底径5.4cmを測る。色調は黄褐色。外面はロクロ整形、内面はヘラミガキ。底部は右回転糸切痕。9世紀末葉～10世紀前半の所産。

2は諸磯b式土器。12aトレンチ、X10・Y50グリッド出土。色調は黄褐色。地文に縄文RIを施文し、半截竹管による連続爪形文が付けられる。胎土・焼成とも良好である。

3は諸磯b式土器。2aトレンチ、X20・Y25グリッド出土。色調は黄褐色。地文に縄文RIを施文し、浮線文が付けられる。赤褐色で胎土・焼成とも良好である。

4は諸磯c式土器。第1号土坑の覆土出土。地文に集合沈線文を施し、円形貼付文、耳たぶ状の貼付文が付けられる。黄褐色で胎土・焼成とも良好である。

5は縄文早期後半の無文土器。6bトレンチ、X40・Y35グリッド出土。外面はナデにより仕上げられ、内面はザラ付いている。やや砂粒を含む赤褐色で、焼成は良好である。

6は縄文早期後半の無文土器。Aトレンチ、X30・Y35グリッド出土。外面はナデにより仕上げられる。赤褐色で、焼成は良好である。わずかに繊維を含むものとみられる。

7は打製石斧。第1号土坑の覆土。わずかに括れを持ち、頁岩製で表面には主要剥離面を大きく残している。裏面中央部には礫面を残す。長さ7.7cm、幅4.0cm、厚さ1.4cm、重さ49.5gである。

8は石核。1aトレンチ、X30・Y20グリッド出土。黒色頁岩製。丁寧な打面調整がみられる。一部礫面を残す。長さ5.2cm、幅7.4cm、厚さ4.4cm。重さ168gである。

9は削器。黒色頁岩製。3 a トレンチ、X20・Y25グリッド出土。表裏面とも大きく主要剥離面を残す。表面の下部に調整が施される。長さ8.8cm、幅18.1cm、厚さ2.7cm、重さ345gである。

10は凹石・磨石。3 a トレンチ、X20・Y25グリッド出土。粗粒安山岩製。表面に凹みと磨面、左側縁に磨面、裏面にも磨面がみられる。長さ9.5cm、幅7.8cm、厚さ4.3cm、重さ448gである。

VI 成果と問題点

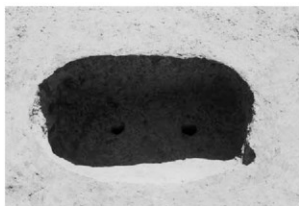
堀越甲真木遺跡では、土坑と炭窯が検出された。土坑は、縄文時代の所産と考えられる土坑「所謂陥し穴」8基と凹形等の土坑3基であった。土坑の特徴を列挙すると、陥し穴状の遺構では、上面の平面形は楕円形で、底面の平面形は隅円長方形を呈する。底面には、いずれも2ないし3個のピットが確認された。深さは70cmから、倍となる140cmとなるものもあった。遺物は縄文土器片、剥片を覆土中からわずかに検出した。陥し穴は調査区西側で2基、東側で6基検出した。調査区西側は2基のみの検出であるので判断できないが、東側6基については、等高線にほぼ平行で、配列の間隔も一定の距離を保つ規則性を持っている。本調査区の標高は200mであるが、この「所謂陥し穴」は標高550mの赤城山南麓から検出され始め、400m前後の台地上に濃密に分布、狩猟が活発に行われていたことが、周囲の調査より判明していた。また近年の調査により、堀越甲真木遺跡とほぼ同じ標高、それ以下の110mにある前橋市の頭無遺跡でも検出している。この地域は、赤城山南麓に含まれることから、この全域で陥し穴を利用した狩猟が広く行われていたことが窺える。それ以外の土坑であるが、第6号・8号は平面形は上面・底面とも凹形で断面形は箱状となっている。第7号は、平面形は上面が隅円長方形、底面はU字状であった。いずれも遺物の出土はなく機能・用途は不明である。

炭窯は、土層の堆積、出土した遺物の須恵器の坏から平安時代後期のものと考えられる。検出した場所は、調査区南東部であった。平面形態は扁平な羽子板状を呈していた。覆土の堆積状況が、黒褐色土、焼けたローム層等を繰り返し堆積していることから、複数回の操業がされていたことが想定できる。燃焼室の床面は焚き口部から左右両壁は垂直に立ち上がり、床面からは拳ほどの炭の塊を確認した。煙道であるが、奥壁付近の東壁から27cm、80cmの場所に2カ所付設されていた。煙道からは、多くの炭の塊を確認した。調査区の境界に近い場所から検出したため、製鉄炉やその他の炭窯の検出はなかった。

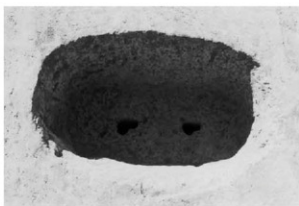
堀越甲真木遺跡では住居跡などの遺構の検出もなく、遺構数や遺物量も極めて少なかった。しかし、縄文時代の狩猟目的である土坑の検出があり、赤城山南麓地域で広く分布していた情報を更に追加する調査となった。また平安時代の炭窯の検出もあり、この区域が広い時代を通じ、生活の場として利用がされていたことが窺えた。今後の周辺地域の調査が進展して行くにつれ、この地域の様相も少しずつ明らかになって行くと考えられる。



調査区全景 (北東から)



JD-1号土坑全景 (北から)



JD-2号土坑全景 (北から)

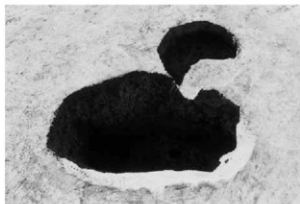


JD-3号土坑全景 (南から)



JD-4号土坑全景 (南から)

PL.2



JD-5、6号土坑全景（北から）



JD-7号土坑全景（西から）



JD-8号土坑全景（北から）



JD-9号土坑全景（南から）



JD-10号土坑全景（南から）



JD-11号土坑全景（南から）



K-1号炭窯全景（北西から）



K-1号炭窯出土遺物

発掘調査報告書 抄録

フリガナ	ホリコシコウマキイセキ
書名	堀越甲真木遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著書名	後藤俊継・遠藤たか美
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10番地2
発行年月日	平成18年3月10日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
堀越甲真木遺跡	堀越町578番 1ほか	10201	16111	36°25'24"	139°08'38"	20050106 20050203	4,700㎡	工業団地 造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀越甲真木遺跡	生産地	縄文・平安時代	土坑1基、炭窯1基	須恵器、縄文土器	なし

調査依頼者 前橋市長 高木政夫
 調査主体者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 根岸 雅
 調査担当者 後藤俊継・遠藤たか美
 調査参加者 友永 茂・杉岡富雄・中村富子・勅使河原幸枝
 萩原秀子・登坂うた子・斉藤頼江

堀越甲真木遺跡 (1611)

平成18年3月10日 発行

平成18年3月3日 印刷

編集・発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
 〒371-0018 前橋市三俣町二丁目10番地2
 TEL 027-231-9531

印刷 上海印刷工業株式会社